

---

# 首都高ランナー

ただの屍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

首都高ランナー

### 【Nコード】

N0198J

### 【作者名】

ただの屍

### 【あらすじ】

S2000で首都高を走る「トモヤ」は  
仕事のストレス等を発散させる為に深夜の横羽線へと車を出す。  
100キロオーバーで走っていたトモヤのS2000は  
遙か後ろから猛然と迫る一台の車に気が付かなかった…

## 第1話 憧れの……（前書き）

作者は自分でも分かる程に文才がないので  
読むと気分を害するかもしれない。

下手でも宜しければ読んで下さると嬉しいです。

## 第1話 憧れの……

深夜0時、首都高速横羽線。

一般車の少ない横羽線に黒のS2000が走っていた。

そのS2000に乗る「トモヤ」は仕事が上手く行かず、どうにもならない程のストレスが溜まっていた。

そのストレスを走る事で発散させようとしていたが、いつもより少々「つまらない」と感じ、速度を落としていた。

(この頃何も上手くいってないな……)

緩いカーブを抜け、先の見えない程の長さのストレートが見えた。

トモヤはアクセルを踏む力を少し強めた。

ストレートに入ってから10秒程度経った時、後ろからある車が猛然と迫ってきていた。

(なんだ?)

唸り声を上げる様なエンジン音。

低い音だったがとても大きいその音は徐々に近寄ってきている。

(…あれは…GTO!?)

三菱・GTO ツインターボ。

1700キ口あるその車は高速域での安定感が高いが、

その分コーナーでの扱いが難しい上、S2000よりも約500キロも重い。

しかしそんな事など関係ないと言っているかの様にその黒く塗られたGTOは右へ左へと軽々しく動く。まさに「自在」という言葉がよく似合った。

呆気にとられていたトモヤは慌てつつアクセルを強く踏んだ。スピードは徐々に上がり、最高速度の180キロに達した。

少しずつGTOに追いつき、やがて並んだ。

その瞬間GTOのマフラーが火を吹き、重量級の車とは思えない程の加速でS2000から離れて行った。

(なっ……え……?)

再び啞然とする。

我に返った頃には壁が迫ってきていた。

「うわっ!」

急ブレーキと共にハンドルを切る。

勿論曲がれるはずもなくスピンしてしまう。

屈辱を味わったトモヤは怒りを飲みこもうとしたが、我慢できずにハンドルを殴りつけた。

8 時間後

「GTOお〜?」

そんなのウソだ、とでも言うような疑わしい声で聞き返したのはトモヤの知り合い、車屋のマサユキ。

「ホントだよ、GTOとは思えない加速でさ。」

「ホントだよ」とは言ったものの、  
本当にGTOだったのか自分でも疑わしくなった。

「ふーん…」

おおそつだ、S2000のエアロパーツあるぜ。  
どうだ?見てくか?」

突如話を変えられ、少し顔をしかめたが  
すぐに表情を戻して素っ気無い返事を返す。

「ああ…」

マサユキに連れられて奥に行こうとした時、  
1台の車が目に入った。

白のBCNR33 SKYLINE GT-R V-spec.

その車は小さい頃から憧れていたスポーツカーだった。

最近はずっと見ていなかった為か目を丸くして見とれていた。

「こつちだ…っておい、トモヤ！」

声は聞こえていたが、それでもずっと見とれていた。

「何見てんだよ……？」

マサユキがこつちに来るとその事に気づいた様で、

「あの車が欲しいのか？」

確かに欲しい事は欲しいのだが、  
500万以上するGT-Rを買うような金は持っていなかった。

「いいぜ、タダで持っつても」

「えっ」

そんな事を言われるとは思っていなかったため、  
自然に口から出た言葉は裏返ったような変な声になった。

「理由はボンネット開けてみれば分かる」

マサトシから鍵を貰い、車に入ってボンネットを開ける。

「なんだ…これは…!？」

エンジンルームは殆ど汚れていないどころか  
整備までキチンとされていた。

「前の奴がお前と同じ走り屋だったらしくてな。」

チューンまでされてるから」

だった、という言葉が突っかかったが受け流し、再びエンジンルームを見た。

「600馬力はあるみたいだぜ。

誰も買ってかねえからお前持ってってくれよ」

本当は飛び上がりたい程嬉しかったが

「冗談だ」と言われると恥ずかしいので聞いてみる。

「ホントに持ってっつていいのか？」

「勿論」

どうやら本当だったようで、

数日後GT-Rは自宅に納車された。

第1話 憧れの……（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

日本語がおかしい所があるかもしれませんが……  
読みづらいかもしれません。本当に申し訳ないです……

良作とは言えませんが（寧ろ駄作）  
頑張って続けていくつもりです。

## 第2話 GTOの男

深夜11時、トモヤは33Rの試運転の為、湾岸線に乗った。

大黒線を抜けてベイブリッジへ着く。

試運転という事もあってトモヤはアクセルを7分程度踏んだ。

凄まじい音を立てて33Rは急加速してゆく。

(なんだこの加速は…!?)

2秒程度で速度は180キロを超す。

そして200キロを超えた所で怖気ついてしまい、アクセルを戻す。

メーターの針は160キロ前後で揺れている。

一度心を落ち着かせ、トモヤは再度アクセルを踏んだ。

200キロに達し、トモヤの目は怯えていた。

(怖え…だけどこんなんでビビってちゃあ首都高は走れない)

速度はやがて250キロに達し、一般車は景色と共に後方へ弾け飛んでいく。

それでもアクセルは戻さなかった。

ベイブリッジを抜けると後ろから何かが聞こえる。

唸り声のような、低い大きい音。

あのGTOがバックミラーに映る。

此方の速度は280キロを超えていたが、GTOはすぐにこちらへ近づいてくる。

そしてGTOが真後ろに来たとき、此方に対してパッシングした。

勿論、退く気はなく、トモヤはアクセルを最大まで踏んだ。

GTOは此方に退く気がない事を悟ったようで33Rの後ろについた。

速度は既に300キロを超えている。加速は次第に鈍り、310キロからは殆ど速度が上がらなくなる。

対して加速の終わらないGTOはスリップストリームを使い、こちらの前に出た。

「逃がすか！」

此方もスリップストリームを使用し、加速した。

何とかGTOを射程に捉える。GTOが迫ってきた所でハンドルを右に切り、GTOをかわして横に並ぶ。

(一瞬でも気を抜いたらおいていかれる…)

僅かにGTOが前に出る。

その事に一瞬心が揺らぎ、足の力が緩む。

トモヤの33Rは速度を落とし、GTOは飛ぶように遙か彼方へ消えた。

(さっき自分で言ったばかりなのに氣イ抜いちまったな…)

トモヤは湾岸線を降り、近くの喫茶店に車を停めた。

その喫茶店に入ろうとした時、先ほどのGTOが前に停まっていた。

「…!」

鍵がつけっぱなしで放置されていた。

トモヤは好奇心で車に入り、ボンネットを開けた。

エンジンルームはトモヤの33R程ではないが綺麗に掃除されていた。

整備も行き届いているようで何一つ不満がない。

(すごいな…これ…)

「あの…」

不意に話かけられ、少し驚きつつも相手を見た。

見たところ20歳前後で、明るそうな性格の男だった。

「もしかしてこれ貴方のですか？」

「そうですね」

思っていた印象とは似ても似つかない。

もう少しワルそうな不良っぽい人じゃないかとトモヤは思っていた。

男は辺りを見渡し、少し遠くに止まった33Rを見て言った。

「もしかしてさっきの？」

男はトモヤがああの33Rの乗り手だという事に気づいて言った。

「はい」

頷きつつ返事をする男は言った。

「上手ですね。本気だったんですけど……」

全く歯がたたないと感じていた為、トモヤは少し嬉しくなった。

「結局負けてしまいましたけどね」

「途中でアクセル抜いたでしょう？」

「多分そのせいですよ」

(…ちよっと頼んでみるか)

「隣に乗せてくれませんか？」

「えっ？」

駄目か、と思ったトモヤは小さく舌打ちした。

「参考にしたんですが…駄目ですか？」

「…いえ、いいですよ。」

別に参考になるかどうか分かりませんが…」

OKの返事を聞くとトモヤはそそくさと助手席に乗り込んだ。続いて男も乗り込み、エンジンを掛けた。

「では行きましょうか」

GTOは発進し、C1へと向かった。

やがてC1内回りへ入り、GTOは33Rより凄まじい音を立てて加速した。

（凄い腕だ…）

難易度が高く、性能も腕もいるC1で1700キロのGTOは基本的に不利なのだが、そんな事はおかまいなしにそのGTOを曲げていく。

（アンダーの出やすい4WD、そして重い車重…

この人にはそんな事眼中にもなさそうだ)

連続で橋脚が迫る厳しいカーブも流すようにクリアしていく。

(この男は一体何者なんだ…!?)

やがて環状を下り、先程の喫茶店へ戻った。

「色々参考になりましたよ。ありがとうございました。」

「それは良かったです。」

「じゃあまた勝負しましょう。えーと…」

名前を聞いていなかったなので口籠る。

「ユウキです、そちらは？」

「トモヤです。」

「また宜しくお願いします、トモヤさん」

「こちらこそ」

ユウキはGTOに乗り込み、走り去っていった。

(すげえな畜生…)

GTOが見えなくなるまで見送った後、

トモヤは喫茶店に入るのを忘れて帰宅した。

## 第2話 GTOの男（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

名前に特に意味とかはないです。

いつまで続くかは分かりませんが、

完結するまでは放置とかしません。多分。

ではありがとうございました。

### 第3話 S15

深夜2時、首都高速神奈川1号横羽線。

マサユキを乗せた赤いS15シルビアが80km/hで横羽線を駆け抜ける。

規定速度を守りながらもその動きはラフで、首都高ランナーを感じさせる。

彼は首都高に憧れていたが、違反をしてまで走るつもりはなかった。

「ん？…ああ、またか」

S15のバックミラーに移ったのは180km/h程度で走る青い34R。

直ぐに車線を変更するとその34Rは猪のようにS15の横を突き抜けていった。

(あれは本物の首都高ランナーじゃない…)

彼は動きによって本物の首都高ランナーと唯の走り屋を見分けられるようになっていた。

やがて横羽線から湾岸線へと分岐した。

湾岸線へ入った途端に凄まじい音がする。

唸り声のような低く、それでも大きい音。

その音の正体はS15のバックミラーに迫っていた。

(GTO…これが…!?)

GTOはS15を紙一重でかわし、先程の34Rとは同じよう異なる動きをしながら

弾丸のような速さで終わりの見えない直線を駆け抜けていった。

(…いい音だったぜ……トモヤがあれを追いたくなる

理由が分かった気がする)

心の中でいけないと思いつつもマサユキの足はアクセルを強める。

120km/hに達した所でマサユキは我に返り、アクセルを戻した。

(何やってんだ俺は…違反は駄目だ、駄目なんだ…絶対…)

アクセルを踏みたい気持ちを抑える為、マサユキは湾岸線を降りていった。

翌日、マサユキは自分の店に籠り、S15のエンジンを見ていた。

(改造したい…あのGTOを追ってみたい……だけど…)

小1時間悩んだ末、

(いけない事は分かってるんだ…けどあのGTOを…)

約20分後、ドアを開けて入ってきたのはトモヤだった。

「悪いな、走ってる途中だったのに呼び出したりして」

対しトモヤは嫌な顔一つせずと言う。

「別にいいよ。一人で流してただけだしさ」

その一言から一呼吸置き、トモヤは聞いた。

「でも、なんでいきなり呼び出したんだ？」

「ちよつとこれを見てくれ」

シャッターを上に向け、中に現れたのは赤のS15。

首都高を走る者は走る事や目で教えてくる。

「…いいんだな？」

「俺はそのつもりで呼んだんだ」

トモヤは微笑みつつボンネットを開け、チューニングを開始した。

チューニング開始から10時間経った時、そのS15はトモヤの3RRやGTOとは違う威圧感がある。

「速そうに見えるな……」

マサユキが見た感想を正直に口に出すと、

「実際速いと思うよ。様子見でまだ400馬力だけど。」

「何がまだだよ。俺にとってはもう400馬力だぜ。」

そう言つとトモヤは鼻で笑う。少しの沈黙の後、マサユキが口を開く。

「150も上がったのか……それで、どこを走る？」

「C1だな」

トモヤがそう言つとマサユキはアクセルを踏み、C1へと上がつていった。

初めての400馬力超車という事もあつてかマサユキはあまり乗れていなかった。

400馬力でありながら低速からの加速はトモヤの33Rをも凌駕する。

「速え速え。全然乗れてねーよ」

「もうちよつと落ち着いてカウンター当てろ」

「お前みたいに馬鹿じゃねーからできねーんだよ」

「馬鹿は余計だ。…リアが滑ってるぞ！」

「やべっ！あぶ、ぶつかるーっ！」

この後10分程経つと少し慣れたのか動きが大人しくなった。

「ちょっとオーバーステア気味だな…ハンドル切るのもうちちょっと後でいいか」

「おお、そうしてみる。」

この後もC1を何週かすると完全に慣れたようで、

「俺って天才なんじゃね？…おとと」

「調子に乗ってるとぶつけるぜ。巻き添えはゴメンだ」

調子に乗るマサユキを落ち着かせつつ、マサユキの走りを見守った。

「来たな、あいつだ」

この時マサユキにはまだ聞こえておらず、「何が？」という顔をす  
る。

10秒程経つとやがて聞こえ始めた。

GTOだ。

S15を確認したGTOは後ろにつき、退くのを待つ。

「そんな簡単に退くかよ…！」

退かせるのを諦めたGTOは車線を変え、250km/hを超える速度から更に急加速。

マサユキは諦めずにアクセルを踏み、追いつこうとしたが既に遅い。

「アツという間に消えちゃった…」

「おい、あっさりすぎるわ。もう少し粘れよ」

「うるせえなあ…」

その後C1を1週し、分岐線からC1を降りていく。

「もう良いのか？」

「いいんだよ」

その一言でトモヤは喋るのをやめ、外の景色を眺めていた。

因みにマサユキがラフなワイルドすぎる走りをしたC1では事故を起こした車があり、渋滞となっていた。

第3話 S15 (後書き)

あけましておめでとございます。  
パソコンが故障したため、少しの間書けませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0198j/>

---

首都高ランナー

2010年10月15日21時32分発行